

復習テストが授業時間外学習に及ぼす効果

Do the review tests increase the out-of-class study time?

笹山 郁生

Ikuo SASAYAMA

(教育心理学講座)

(平成25年9月30日受理)

要 約

受講生の授業時間外学習を促進するために、毎回授業開始時に、前回の復習テストを実施する実践をおこなった。その結果、受講生は、毎週平均50分程度、授業時間外の学習をしていること、復習テストの総得点が高くなるほど、授業時間外の学習時間が長くなるとともに、マークシート方式の期末テストの得点も、実際に高くなることが明らかになった。結果に基づき、筆者がこれまで実践してきた川柳作成課題と復習テストとを有機的に連携させる必要性について考察した。

キーワード：単位制度の実質化、授業時間外学習、復習テスト

I. はじめに

『21世紀の大学像と今後の改革方策について(答申)』¹⁾において、大学審議会が、1998年に、単位制度の実質化を図るよう指摘して以来、シラバスの充実や履修科目登録の上限設定、GPA(Grade Point Average)の導入など、各大学は、さまざまな手法を実施してきた。しかしながら、『学士課程教育の構築に向けて(答申)』²⁾において、中央教育審議会が、2008年に、学生の学習時間が短く、授業時間外の学修を含めて45時間で1単位とする考え方が徹底されていないと指摘しているように、特に、学生による授業時間外学習の時間確保は、いまだ十分なされていないと言いがたい。

このような流れを受け、筆者は、授業の復習課題として、受講生に川柳を作成させることにより、学生による授業時間外学習の時間確保を目指してきた。³⁾⁴⁾この課題を導入することにより、受講生は、授業時間外に平均40分弱の学習をしていたことから、川柳作成は、受講生の授業時間外学習をある程度促す効果のあることが示された。しかし、この実践対象授業は2単位講義科目であり、単位制度上必要とされる週換算180分の授業時間外学習時間と比較すると、受講生の実際の授業時間外学習量はまだまだ不十分である。

そこで、学生の授業時間外学習をより促進するための試みとして、2013年度の授業では、授業開始時に、毎回、前時の復習テストを実施する実践を試みた。本稿では、この復習テストが、学生の授業時間外学習や期末テストの成績にどのような効果をもたらしたのかについて報告する。

II. 実践対象授業と実践方法

1. 実践対象授業の特徴

1) 実践対象授業 2013年度前期に福岡教育大学で開講された「学校心理学」を対象に実践をおこなった。この授業は、これまで、筆者が川柳作成課題を課してきた授業であり、教育職員免許法上の位置づけなど、授業の大枠については、前稿と大きく変更されていない。⁵⁾

2) 実践対象授業の開講期と開講時間、受講生の特徴 実践対象授業は、1年生前期に、2単位講義形式の必修授業として、同一内容の授業が複数クラス開講されているうちのひとつである。授業時間帯は月曜日の4時限目(14:30~16:00)⁶⁾であり、その受講生は、中等教育教員養成課程の国語・社会・英語・音楽・美術・保健体育・書道の各専攻に所属する1年生81名(男性37名、女性44名)であった。⁷⁾

2. 実践方法

1) 復習テスト 復習テストは、毎時授業開始時に、出席調査とともに、マークシート方式で実施した。⁸⁾問題は各回10問で、選択肢は2つから5つの間だった。問題と選択肢は、通常、授業に用いているMicrosoft社PowerPoint 2010を用いて、1問あたり20秒提示し、受講生は、ノートやテキストを自由に見ながら解答した。なお、出題順序は、授業で講義したとおりであった。また、復習テストの最後に、先週のこの授業に対する授業時間外の学習時間を、分単位で記述させた。解答用紙を回収したあと、復習テストについて、簡単な解説をおこなった。

表1 復習テストと授業時間外学習の結果

授業回	復習テスト				授業時間外学習(単位:分)				復習テストと授業時間外学習時間の相関
	平均値	標準偏差	最大値	最小値	平均値	標準偏差	最大値	最小値	
第2回	.74	.16	1.00	.30	50.06	34.78	180	5	.19
第3回	.71	.14	1.00	.40	62.31	46.08	300	5	-.11
第4回	.76	.20	1.00	.10	53.96	27.80	150	15	.26*
第5回	.87	.14	1.00	.50	53.33	32.36	150	5	.41**
第6回	.73	.17	1.00	.40	50.87	34.67	180	0	.36**
第7回	.71	.14	1.00	.40	51.09	32.16	160	0	-.11
第9回	.82	.17	1.00	.20	51.84	31.21	120	0	.43**
第10回	.75	.15	1.00	.30	46.56	30.27	180	0	.06
第11回	.61	.17	1.00	.20	41.41	24.61	150	0	.42**
第12回	.88	.14	1.00	.40	46.04	30.38	150	0	.13
第13回	.78	.16	1.00	.30	50.04	31.16	180	3	.26*
第15回	.59	.17	.90	.10	49.44	37.62	180	0	.31**
合計	8.70	1.18	10.50	5.90	580.73	284.68	1600	115	.45**
平均	.74	.09	.89	.51	50.21	23.83	133.33	12.50	.40**

* $p < .05$, ** $p < .01$

2) 授業時間外学習の指示 受講生には、初回オリエンテーション時に、授業時間外学習として、①毎回、次週の授業で扱うテキストの該当章を伝えるので、当該章を読み、その内容をしっかりと理解してこること、②毎回、復習テストを実施するので、授業内容についてしっかりと復習すること、③授業で扱った内容や感想に基づいて川柳を作り提出すること⁹⁾の3点を指示した。

3) 期末テスト 期末テストでは、5つの選択肢から解答を選択するマークシート方式の問題60題と論述式問題1題を出題した。なお、マークシート方式の問題は、復習テストと同内容の33問と、期末テスト用に新たに作成された27問から構成された。これら60問を、復習テストと同様、Microsoft社のPowerPoint 2010を用いて、1問あたり20秒呈示した。なお、出題順序は、授業の進行とは無関係な順序で呈示した。また、期末テストでは、スライドが切りかわる時に、合図のベルが鳴るようにした。

期末テストでは、まず、マークシート方式の問題を実施し、その答案を回収した後、論述式の問題を実施した。なお、論述式の問題と同時に、後述する授業評価アンケートへの回答も求めた。これらすべてを含めた試験時間は60分であった。

4) 評価 本授業では、①川柳の提出数(各回1点×16回=16点)¹⁰⁾、②復習テスト(各回1点×14回=14点)¹¹⁾、③期末テスト(70点:マークシート方式1点×60問=60点、論述式10点)を合計(計100点)した点数を用い、90点以上を「秀」、80~89点を「優」、70~79点を「良」、60~69点を「可」、59点以下を「不可」として評価した。

Ⅲ. 実践結果

1. 復習テストと授業時間外学習との関連

表1に、各回の復習テストの結果と、受講生による各回の授業時間外学習時間の自己報告の結果を示

した。¹²⁾表1より、授業回により多少の変動はあるものの、復習テストの得点率は、7割から8割程度であることが示された。このことより、復習テストの難易度は、受講生にとって、中程度であったと考えられる。

また、授業時間外学習については、すべての回の平均が50.21分であり、川柳作成課題のみを課した場合よりも、10分強、学習時間が長くなることが示された。授業時間外学習を最も長くしていた受講生の平均学習時間は、週あたり133.33分であった。この受講生の場合、期末テストのための学習時間を考慮すると、単位制度が求める学習時間に、かなり近い学習時間を確保していたものと考えられる。一方、授業時間外学習が最も少なかった受講生の場合には、週あたり平均12.5分しか学習していなかった。

さらに、復習テストと授業時間外学習時間との相関を見てみると、1回ごとの相関については、必ずしも高くない回も散見されるものの、1学期を通して見てみると、復習テストと授業時間外学習時間との間には、中程度の正の相関があることが示された。これらの結果より、復習テストには、受講生の授業外学習時間にある程度促進する効果があるとともに、授業時間外学習に時間をかけている受講生ほど、復習テストの成績が良くなる傾向になることが明らかになった。

2. 授業評価アンケートの結果

期末テストの際に、記名式による授業評価アンケートも実施した。このアンケートは、期末テストの後半に実施した論述式問題への解答と同時にこなった。なお、アンケートのリード文に、このアンケートは授業改善のために実施すること、回答内容は成績とは一切関係しないこと、回答したくない質問には回答しなくて構わないことを明記した。この授業評価アンケートの結果について、表2と表3に示した。

表2の復習テストについての結果より、85%以上

表2 授業評価アンケートに対する回答の度数分布 (%)

■受講生自身について					
この授業に対して、あなた自身の受講態度はどうか	良かった 16 (19.8)	やや良かった 37 (45.7)	どちらともいえない 21 (25.9)	やや悪かった 5 (6.2)	悪かった 2 (2.5)
自分はこの授業の目標を達成できたと思いますか	6 (7.4)	38 (46.9)	24 (29.6)	9 (11.1)	4 (4.9)
全体を通して、この授業の内容に興味・関心がもてた	23 (28.4)	34 (42.0)	15 (18.5)	6 (7.4)	3 (3.7)
この授業の内容を十分、理解・習得できた	5 (6.2)	34 (49.4)	18 (22.2)	10 (12.3)	8 (9.9)
総合的に、この授業科目に満足した	18 (22.5)	32 (40.0)	19 (23.8)	6 (7.5)	5 (6.3)
■この授業について					
授業の進行速度は	速すぎた 18 (22.2)	やや速すぎた 43 (53.1)	ちょうど良かった 20 (24.7)	やや遅すぎた 0 (0.0)	遅すぎた 0 (0.0)
授業のレベル(難易度)は	難しすぎた 9 (11.1)	やや難しすぎた 38 (46.9)	ちょうど良かった 33 (40.7)	やや易しすぎた 1 (1.2)	易しすぎた 0 (0.0)
授業の目的は明確に示された	22 (27.2)	20 (38.3)	24 (29.6)	3 (3.7)	1 (1.2)
成績評価の方法は明確に示された	47 (58.0)	20 (24.7)	14 (17.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
授業に対する教員の準備は行き届いていた	37 (45.7)	29 (35.8)	13 (16.0)	1 (1.2)	1 (1.2)
教員の話した内容はわかりやすかった	18 (22.2)	30 (37.0)	26 (32.1)	4 (4.9)	3 (3.7)
板書や情報提示(配布資料やOHPなど)はわかりやすかった	23 (28.4)	31 (38.3)	18 (22.2)	7 (8.6)	2 (2.5)
■川柳について					
あなたにとって、川柳の作成は楽しかったですか?	楽しかった 15 (18.5)	やや楽しかった 26 (32.1)	どちらともいえない 22 (27.2)	やや楽しくなかった 11 (8.6)	楽しくなかった 7 (8.6)
あなたにとって、川柳の作成は難しかったですか?	15 (18.5)	32 (39.5)	22 (27.2)	5 (6.2)	7 (8.6)
川柳の作成は、授業の復習に役立ちましたか?	30 (37.0)	23 (28.4)	13 (16.0)	11 (13.6)	4 (4.9)
皆さんの川柳一覧を配布したことについてどう思いますか?	良かった 27 (33.3)	やや良かった 22 (27.2)	どちらともいえない 26 (32.1)	やや悪かった 2 (2.5)	悪かった 4 (4.9)
川柳一覧は、皆さんの学習に役立ちましたか?	21 (26.3)	20 (25.0)	22 (27.5)	10 (12.5)	7 (8.6)
川柳の作成に興味を持ってましたか?	17 (21.0)	20 (24.7)	20 (24.7)	14 (17.3)	10 (12.3)
■復習テストについて					
復習テストは難しかったですか?	15 (18.5)	43 (53.1)	22 (27.2)	0 (0.0)	1 (1.2)
復習テストは、授業の復習に役立ちましたか?	48 (59.3)	26 (32.1)	6 (7.4)	0 (0.0)	1 (1.2)
復習テストは、授業内容の理解に役立ちましたか?	48 (59.3)	23 (28.4)	9 (11.1)	0 (0.0)	1 (1.2)
復習テスト終了後、復習テストの内容について解説したことについてどう思いますか?	57 (70.4)	15 (18.5)	9 (11.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
1回あたりの復習テストの問題数についてどう思いますか?	10 (12.3)	8 (9.9)	62 (76.5)	1 (1.2)	0 (0.0)

()内は有効パーセント

の受講生が、復習テストが授業の復習や授業内容の理解に「役立った」、または「やや役立った」と考えていることが示された。また、半数強の受講生が、復習テストは「やや難しかった」と回答しているものの、受講生の76.5%が、問題数については「ちょうどよかった」と回答していたことより、復習テストの実施方法について、受講生はほぼ適切であったとみなしていたものと思われる。また、表3より、授業評価アンケートでは、授業時間外学習の平均時間は43.94分であり、各回の自己報告の平均値である50.21分よりも、若干短くなっていた($t_{(79)} = 3.55, p < .01$)。

なお、これらの授業評価の結果を、過去の授業評

価アンケートの結果¹³⁾と比較したところ、「この授業に対して、あなた自身の受講態度はどうか($\chi^2_{(4)} = 9.83, p < .05$)」(本年度の受講生の方が「良かった」と回答)、「授業の進行速度($\chi^2_{(2)} = 20.51, p < .001$)」「授業の難易度($\chi^2_{(3)} = 9.33, p < .05$)」(本年度の受講生の方が「速すぎた」「難しすぎた」と回答)、「成績評価の方法は明確に示された($\chi^2_{(4)} = 11.00, p < .05$)」(本年度の受講生の方が「明確だった」と回答)、「教員の話した内容はわかりやすかった($\chi^2_{(4)} = 8.53, p < .10$)」「板書や情報提示(配布資料やOHPなど)はわかりやすかった($\chi^2_{(4)} = 8.51, p < .10$)」(いずれも過去の受講生の方が「わかりやす

表3 授業評価アンケートに対する回答の記述統計

質問項目	度数	平均値	標準偏差	最大値	最小値
あなたはこの授業の予習・復習にどれくらいの時間を費やしましたか（1回の授業あたりに平均して）？（単位：分）	80	43.94	24.27	120	0
あなたは試験に向けてどれくらい勉強しましたか？（単位：分）	76	248.64	192.99	1040	2
マーク式試験の予想得点は？（60点満点）	78	39.09	8.66	55	13
論述式試験の予想得点は？（10点満点）	74	5.32	1.69	10	1
あなたは、川柳の作成に、1回あたり平均して何分くらいの時間をかけましたか？（単位：分）	79	14.65	8.72	40	1
もし復習テストがなかったら、授業時間外の学習に、1回あたり平均して何分くらいの時間をかけたと思いますか？（単位：分）	78	18.04	18.75	90	0

かった」と回答)の項目で差異が認められた。また、授業時間外学習についても、過去の受講生と比較して、本年度の受講生の方が、より時間を費やしている傾向にあることが示された ($t_{(222)} = 1.87, p < .10$)。これらの結果を概観すると、過去の受講生と比較して、本年度の受講生の方が、自分自身はまじめに授業に参加したものの、授業進行についていくことができなかったと考えていたことが明らかになった。

さらに、川柳作成課題について同様の比較を行ったところ、「あなたにとって、川柳の作成は楽しかったですか？ ($\chi^2_{(4)} = 15.56, p < .01$)」「あなたにとって、川柳の作成は難しかったですか？ ($\chi^2_{(4)} = 8.17, p < .10$)」「川柳の作成は、授業の復習に役立ちましたか？ ($\chi^2_{(4)} = 19.16, p < .001$)」「皆さんの川柳一覧を配布したことについてどう思いますか？ ($\chi^2_{(4)} = 7.84, p < .10$)」「川柳一覧は、皆さんの学習に役立ちましたか？ ($\chi^2_{(4)} = 10.39, p < .05$)」「川柳の作成に興味を持っていましたか？ ($\chi^2_{(4)} = 27.48, p < .001$)」のすべての項目において、過去の受講生と比較して、本年度の受講生は、川柳作成課題について否定的な評価をしていたことが示された。

本年度の受講生が、過去の受講生と比較して、川柳作成課題の有効性を感じなかった理由としては、最終評価に占める川柳作成課題の割合が低かった¹⁴⁾影響も考えられる。しかしながら、本年度は、復習テストや期末テストにおいてマークシート方式のテストを採用したが、受講生に川柳作成課題の有効性を感じさせなかった理由かもしれない。この点については、後述する。

3. 復習テスト・授業時間外学習時間と授業評価アンケート・川柳作成課題との関連

復習テストの成績が、授業評価アンケートの結果や川柳作成課題の各指標とどのような関連にあるのかについて調べるため、復習テストの合計点と表2、表3で示した授業評価アンケートの各項目、および、川柳提出数、川柳提出までの平均所要時間(分)、川柳の作成意図の総文字数との相関係数を算出した。¹⁵⁾

その結果、「あなたはこの授業の予習・復習にどれくらいの時間を費やしましたか ($r = .49, p < .001$)」「この授業に対して、あなた自身の受講態度はどうでしたか ($r = .25, p < .05$)」「全体を通して、この授業の内容に興味・関心がもてた ($r = .27, p < .05$)」「マーク式試験の予想得点 ($r = .35, p < .01$)」「授業の目的は明確に示された ($r = .33, p < .01$)」「成績評価の方法は明確に示された ($r = .27, p < .05$)」「復習テストは難しかったですか？ ($r = -.23, p < .05$)」「復習テストは、授業の復習に役立ちましたか？ ($r = .26, p < .05$)」「復習テストは、授業内容の理解に役立ちましたか？ ($r = .27, p < .05$)」「復習テスト終了後、復習テストの内容について解説したことについてどう思いますか？ ($r = .24, p < .05$)」「川柳提出数 ($r = .46, p < .001$)」「川柳作成意図総文字数 ($r = .39, p < .001$)」の各項目と、復習テストの総得点との間に有意な相関が認められた。これらの結果を概観すると、授業の目的や評価方法をしっかり理解し、授業で課された課題(川柳作成課題を含む)にまじめに取り組んだ学生ほど、復習テストの合計点が高くなること、また、復習テストの得点が高い受講生ほど、復習テストの有効性を認めていることが明らかになった。

次に、毎回の復習テスト時に受講生が自己申告した時間外学習時間の合計についても、同様の相関分析を実施した。その結果、「あなたはこの授業の予習・復習にどれくらいの時間を費やしましたか ($r = .80, p < .001$)」「全体を通して、この授業の内容に興味・関心がもてた ($r = .24, p < .05$)」「この授業の内容を十分理解・習得できた ($r = .25, p < .05$)」「総合的に、この授業科目に満足した ($r = .26, p < .05$)」「マーク式試験の予想得点 ($r = .28, p < .05$)」「論述式試験の予想得点 ($r = .28, p < .05$)」「授業の目的は明確に示された ($r = .26, p < .05$)」「成績評価の方法は明確に示された ($r = .26, p < .05$)」「川柳提出数 ($r = .29, p < .01$)」「川柳作成意図総文字数 ($r = .42, p < .001$)」の各項目との間に有意な相関が認められた。これらの結果は、復習テストの成績との関連と類似しているが、授業時間外学習時間が長くなるほど、授業に対して肯

表4 期末テストの成績と関連する諸変数：Stepwise 法による重回帰分析の結果

	B	標準誤差	β	t 値	有意確率
マークテスト方式 ($R^2 = .647, F_{(6,74)} = 22.65, p < .001$)					
(定数)	7.84	6.94		1.13	.26
復習テスト：合計点	3.34	.53	.49	6.30	.00
あなたは試験に向けてどれくらい勉強しましたか？	.01	.00	.21	2.94	.00
川柳平均提出時間	.01	.00	.28	3.86	.00
復習テストは、授業内容の理解に役立ちましたか？	3.03	.81	.30	3.74	.00
授業のレベル（難易度）は	-2.64	.90	-.23	-2.94	.00
川柳の作成に興味を持ってましたか？	-1.25	.48	-.20	-2.60	.01
論述式 ($R^2 = .196, F_{(2,78)} = 9.50, p < .001$)					
(定数)	3.29	.84		3.94	.00
合計授業時間外学習時間	.00	.00	.36	3.52	.00
復習テストは、授業内容の理解に役立ちましたか？	.37	.18	.21	2.01	.05

定的に評価していること、ならびに、授業時間外学習時間と復習テストの有効性との間には有意な相関が認められなかったことという相違点も認められた。

4. 期末テストの成績と関連する変数の検討

これまで本稿で取りあげてきた各変数が、期末テストの成績とどのように関連していたのかについて明らかにするために、マークテスト方式の期末テストの得点と論述式期末テストの得点をそれぞれ基準変数とし、これまで本稿で取りあげてきた各変数を説明変数とする Stepwise 法による重回帰分析をおこない、その結果を表4に示した。表4より、復習テストの合計点が高くなるほど、期末テストに向けての勉強量が多くなるほど、復習テストが授業内容の理解に役立ったと考えているほど、授業のレベルが易しかったと考えているほど、マークシート方式の期末テストの得点が高くなることが示された。また、川柳提出時間が締切間近で、川柳の作成に興味を持てなかった受講生ほど、マークシート方式の期末テストの得点が高くなることも示された。一方、論述式テストについては、授業時間外学習時間が長いほど、復習テストが授業内容の理解に役立ったと考えているほど、その得点が高くなることが示された。

これらの結果より、復習テストの得点が高く、その有効性を認めている受講生ほど、少なくとも、マークシート方式の期末テストの得点が高くなることが明らかになった。一方、これまで、復習ツールとしてその有効性が確認されてきた川柳作成課題については、マークシート方式の期末テストの結果には、むしろ悪影響を及ぼす可能性のあることも明らかになった。

IV. まとめと今後の課題

本実践の結果、毎回授業開始時に、前回の復習テストを実施することにより、本実践の受講生は、毎週平均50分程度、授業時間外の学習をしていたことが示された。また、復習テストの得点が高い受講生ほど、授業時間外学習時間が長く、復習テストが授業内容の

理解や復習に役立ったと感じるとともに、マークシート方式の期末テストの得点も、実際に高くなっていたことが示された。これらの結果から、復習テストの導入は、受講生の時間外学習を促進するのに有効であることが示された。

一方、本実践では、これまで復習ツールとして、その有効性が確認されてきた川柳作成課題について、その効果が疑問視される結果が示された。このことの原因としては、本実践の成績評価において、マークシート方式のテストの得点の割合が高かったことが考えられる。

マークシート方式のテストで問われていることは、主に学校心理学についての基礎的知識であり、これらの知識を習得し、テストで高得点を取るためには、ひとつひとつの専門用語の意味について、しっかりと暗記する必要がある。受講生が、専門用語の暗記に努力を注いだ場合には、もしかしたら、授業全体の流れについて理解することまでには、注意が向かなくなってしまうかもしれない。

一方、授業内容に基づいて川柳を作成する場合には、授業全体を振り返り、授業のポイントをしっかりと把握することが必要となる。このことが川柳作成課題の最大のメリットである。実際、過去の受講生からは、「川柳を考えることと同時に、復習ができるというのは、意外だったが、やってみると、良いものをつくろうと思い、またノートに目を通すと、良い循環だったと思う。川柳のための復習という感じもあり、嫌にならなかった。」「川柳を作ることに對して、それが課題であるとは驚きましたが、何回かしていくうちに、授業をふり振り返り、何が大事でどう要約できるかを考える時間が必然的に作られ、良かったと思います。」¹⁶⁾といった感想が得られている。

しかしながら、本年度の場合には、復習テストで高得点を取ることに、受講生の学習目的が焦点化されてしまったため、授業全体の流れから、重要なポイントを抽出することについて、受講生はその必要性を感じなかったのかもしれない。あるいは、川柳作成のメ

リットを受講生自身が感じるためには、ある程度、課題に取り組むための時間が必要だったのかもしれない。本年度を受講生の場合には、評価に占める川柳作成課題の割合がそれほど高くなかったこともあり、この課題のメリットを実感するのに十分な時間と労力を、川柳作成にかけるまでには至らなかったのかもしれない。そのために、川柳作成課題に時間を割くことは、マークシート方式のテストにおいて、高得点獲得を目指す受講生にとっては、単に「迷惑な」ことだったのかもしれない。

このように見てみると、同じ復習ツールではあるものの、復習テストと川柳作成課題では、その機能が異なっているのだろう。個々の知識を着実に習得させるためには復習テスト、授業全体の流れから、そのポイントを把握させるためには川柳作成課題が、それぞれ有効な復習ツールとして機能する可能性が考えられる。当然のことながら、個々の知識を習得することと、授業全体の流れを理解することは、学習者にとって、ともに必要なことである。したがって、受講生には、復習テストと川柳作成課題の両者について、同等のウェイトを置いて学習してもらうことが重要となる。そのためには、これら2つの課題を有機的に連携させる方策について、今後、検討しなければならないだろう。具体的には、最終評価において両課題が占める割合や、期末テストの出題形式のあり方などについて、より工夫することが必要であろう。

注

- 1) 『21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—(答申)』(平成10年10月26日 大学審議会)(文部科学省 HP <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm>より引用, 2013年9月27日)。
- 2) 『学士課程教育の構築に向けて(答申)』(平成20年10月24日 中央教育審議会)(文部科学省 HP <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf>より引用, 2013年9月27日)。
- 3) 笹山郁生(2011). 授業復習課題としての川柳教育実践研究, 19, 191-198.
- 4) 笹山郁生(2012). 授業復習課題としての川柳(2) 教育実践研究, 20, 147-154.
- 5) 教育職員免許法上の本授業の位置づけなどについては、注3)4)を参照のこと。ただし、本年度より、カリキュラム改善のための授業内容見直しの一環として、授業に使用するテキストを変更したことにより、授業内容等は、注3)4)の内容とは一部異なっている。なお、本年度は、『永江誠司(編著)(2013). キーワード教育心理学:学びと育ちの理解から教員採用試験対策まで 北大路書房』をテキストとして使用した。
- 6) ただし、15回の授業回数を確保するため、第8回と第14回の授業については、前時と同日の18:00~19:30の時間帯で実施した。
- 7) 正確には、受講生には、前年度、筆者の授業を受講していた再履修の2年生1名と、2学年に編入してきた学生1名が含まれている。
- 8) ただし、第8回と第14回(注6)参照)については、復習テストは実施しなかった。そのかわり、第9回と第15回の復習テストは、出題した10問の中に2回分の内容を含めた。
- 9) 川柳課題の内容と提出方法については、川柳の作成意図の最低文字数を60字としたことと、川柳の提出期間を授業日の19:00から授業週の金曜日12:00までにしたこと以外は、笹山(2012)と同様であった(注4)参照)。
- 10) 提出期限から遅れて提出された場合と、川柳の作成意図の文字数が60字以下の場合には、0.5点減点した。
- 11) 復習テストは、各回10問なので、1問あたり、0.1点の配点とした。ただし、第9回と第15回授業については、1問あたり0.2点とした(注8)参照)。
- 12) 第9回と第15回の復習テストの得点は、評価に際しては、その得点を倍にした(注11)参照)が、本稿の分析にあたっては、他の回同様、1問あたり0.1点の配点として扱った。
- 13) 過去の受講生のデータは、笹山(2011, 2012)のデータをあわせて用いた。なお、具体的データについては、注3)4)を参照のこと。
- 14) 過去の受講生の場合、評価における川柳課題の割合は、本年度の約2倍(笹山(2011)では30%、笹山(2012)では32%)であった。
- 15) 川柳の作成意図の総文字数は、期末テストの成績と有意な正の相関があること、また、作成意図の総文字数は、川柳の提出回数とは有意な正の相関が、川柳提出までの所要時間とは有意な負の相関のあることが明らかになっている。この点については、笹山(2012)を参照のこと。
- 16) 笹山(2011)より引用。